

共同研究室

昭和五四年度第一回研究会（五月十一日）

▼テーマ 欧州経済通貨同盟の発展

——EMS発足にあたって——

報告者 清水貞俊氏

（報告要旨は第二十七巻・第六号論説の項に掲載）

昭和五四年度第二回研究会（六月八日）

▼テーマ 合衆国南部プランテーションの構造変化

——一九三〇年代以降を中心に——

報告者 藤岡 惇氏

報告要旨

一 問 題

アメリカ南部論にかんする開拓者的な労作『アメリカにおける前資本制遺制』の著者、菊池謙一氏が、本年二月一二日逝去された。氏のまさに画期的な業績を批判的に継承することこそ、私たち後学が氏の学思に真に報いる途であらう。

共同研究室

いま氏の業績の特徴を要約すると——①アメリカの「恥部」たる南部の中世的野蛮を正面から問題にし、②その特質の要因を、奴隸解放後のプランテーション制度の残存から説明したこと。③マルクス主義の階級闘争の見地を堅持しながら④社会の全機構的分析を試み、プランテーションの全南部的意義、ひいては全米的意義を鮮明に析出しようとしたことである。まことに氏は、山田盛太郎『日本資本主義分析』を彷彿とさせる手法を駆使して、「人民に直接責任を負う立場から」、合衆国いな全世界の人種主義とファシズムの根として南部プランターの危険な役割に警鐘を乱打したのであった。ところで他方、ニューディール期以降、南部の地は経済的にも政治的にもその相貌を大きく変えており、黑人問題にも一定の変質がみられる。つまり事態の経過は、プランテーション制度の不変不動とアメリカの南部化という氏の見とは、少くも現象的には相当異なる展開を示しているわけである。

本報告は、①氏のプランテーション把握には問題がなかったか、②プランテーションはその後どう変化し、南部社会にどのような影響を与えたのか、について大づかみのサーベイを試みたものである。

一五七（三二五）

二 棉作プランテーションの伝統的構造と

ニューデイルの南部政策

南北戦争後、プランテーションは「小作」制を有する統一的经营体という形で存続した。プランターは一部の土地を、賃労働者を雇って直営し(ホームファーム)、残る土地は小作農たちに耕作させたのである。その際プランターによる製品の買占や生産・生活手段の前貸は、「小作農場」の経営権をプランターに移しかえ、「小作農」を債務奴隷として土地に半ば緊縛する手段であった。つまりプランテーションとは、ホームファームと「小作」制の結合体であり、新しい資本主義的特質と古い隷属的特質とが、相互にその純粹で完全な運動をけん制・制限しあいながら絡みあつた過渡的の制度であつた。

さて大恐慌の危機の深刻化のなかで登場したニューデイル政策は、恐慌克服の鍵の一つを「南部問題」に資本主義発展の南北間の異常な不均衡問題の解決のなかに求めた。こうして「南部問題」解決のしかた、とりわけプランテーション「小作」制の破壊を意図するニューデイル政策の促進をめ

ぐつて、南部全域で熾烈な階級闘争が展開されたのである。

さてその後の客観的事態は、小作制度の劇的崩壊、資本主義的農業成長の方向へと推移したことは、今では明白である。そこで以下、プランテーション制度と黒人差別制度の最強の堡壘として知られ、三〇年代の小作農の土地闘争や六〇年代の公民権運動の最激戦地となつたプランテーションの二大密集地帯に焦点をしばつて、その変化の具体的過程を追跡してみよう。

三 ミシシッピ・デルタ地帯における

プランテーションの動向

南北戦争後に開拓・入植の進んだ新興のこの地帯では、三〇年代初頭まで「小作」制と棉作の成長がつづいた。ところがニューデイルを転機として、賃労働と機械を使うホームファームの棉作への進出にホームファームの急速な拡大が生じた。他方「小作」制はその重心をクローパー(労働手段をもたぬ小作農)へ移しつつ、全体として縮小した。かくしてこの地帯では、棉作への依存を続けたままで五〇年代末には「小作」制はほぼ完全に消滅し、賃労働に全面依存する機械

制棉作大農場地帯に変質するのである。この過程のなかで、小作農の悲惨な土地追いたて事件が頻発し、農村の失業・貧困問題を特に深刻なものとした（イギリスの事態との酷似）。

四 アラバマ黒土地帯の経済的動向

(1) プランテーションの構造変化

はるか奴隷制時代以来、棉作大プランテーションのいま一つの牙城であったこの地帯では、一九一〇年代から牧場化したホームファームによる棉作「小作」制の駆逐が始まったのが特徴である。この過程はここでも大規模な土地追いたてによって、失業者の大群を創出しながら進行し、今日では小作制度は事実上消滅し、かつての一面の棉畑は、大牧場と森林とに転換された。

(2) 小農民経済の動向

ニューデイルの自作農創設事業によって一群の不良プランテーションが細分され、小農民経済の基盤は相対的に拡大されたといえ、大経営に圧迫されて小農民たちの上向的発展は困難である。

(3) 工業化の進展

共同研究室

工業化が黒人労働力の大量的安定的確保に緊縛を不可能にすることを恐れて、プランター階級は伝統的に工業化の動きに消極的であったが、cotton plantation の cattle farm への移行は、この障害を最終的にとり除いてしまった。かくて北部から「逃避」工場を誘致する運動が、プランターをまきこんで熱っぽく展開されるに至った。

五 総括と展望

(1) プランテーションの構造変化の本質は、前近代的・過渡的的制度から資本主義制度への移行であり、その過程で古い土地制度はドラスチックに破壊された。

菊池氏には、土地所有の資本―賃労働関係への規定性についての卓抜な考察があるが、他方プランテーション自体の把握が固定的・一面的に偏していたため、資本による土地所有関係の改造↓逆に土地所有による資本の創出（地代の投資）および賃労働の創出（土地清掃）の方向への能動的な反作用の側面の考察が欠落していた（階級闘争の静的把握に帰結）。ただしこの点は氏の分析の欠陥というよりもむしろ、当時のアメリカ共産党の黒人解放に民族自決権綱領やスターリンらの機械

的な全般的危機論の影響など、時代の制約を強調すべきである。

(2) しかし三〇年代の南部の土地革命闘争の敗北の結果、古い土地制度は地主の手で地主のために破壊された事実を忘れてはならぬ(暴力は農民にたいしてふるわれた)。この事情が右の移行過程に拭いがたい刻印を残すこととなり、小農民や黒人に最大の悲惨を運命づけることとなった。五〇年代以降の南部の公民権運動は、土地革命闘争を欠いた土台のうえで苦闘せざるをえないこととなった。

(3) 今後の課題

①この過程の全国的意義——「古い南部」の資本主義的革新をめざしたアメリカ帝国主義の上からの合理的再編の運動とみてよいかどうか。

②ニューディール以降の南部政策と階級闘争の動的展開との関連の探究。

③黒人運動の伝統的な闘争目標であった・あの土地革命と政治的自由の獲得が、各々その要求の基盤・根拠を喪失するに至った現段階において、黒人問題の現状と課題をどう把握すべきか。

④この過程における北部金融資本の役割と土地所有独自(プランター階級)の役割の相互関係はいかなるものであるのか。またその政治的表現たる共和党と南部民主党の関係をどう押えるべきか。